Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.15*, pp.237-256, 2021
信州大学教育学部研究論集　第15号　pp.237-256　2021年

＜研究報告＞

Bowlby, J. による愛着理論の編成
－乳幼児の健康に関する理論の再分析－

水口　崇　信州大学学術研究院教育系
友川　幸　信州大学学術研究院教育系

キーワード：精神分析，幼児期の偏重，Freud, S.，Erikson, E. H.

１．はじめに

特定の対象と築く情緒的な絆を愛着（attachment）という。愛着が研究の俎上に乗ってから既に70年が経過した。国内の過去10年間に限定しても，愛着に関するレビュー論文は数多く発表されている（e.g.， 平野， 2015； 金谷・赤津， 2014； 川島， 2016； キン，2011； 草野，2014；小島，2017；小島，2019；今野・水谷・星野，2001；工藤・淺田（平野），2017；本島，2011；向井，2018；中島，2016；田附，2015；田附，2017；山本，2011)。これは愛着に関する学術的な関心の高さを標榜している。これら多種多様なテーマのレビューは，近年の研究動向を論じている。すなわち，愛着の研究の現状と今後に関する論議に終始している。このため，愛着の概念やその理論のコンストラクションの議論には重点を置いていない。

研究論文はアカデミアに限定されやすい。一方書籍はアカデミアに留まらず，広く一般に公開される。さらに書籍は，蓄積した研究結果から明確な提言を為そうとする。このため書籍は研究論文と比べ，社会に対して直接的かつ敏速な影響力を有する。おおよそ過去10年に発刊された書籍を整理する。その提言と特徴は，明瞭に区分し難い点も残るが，以下のように大別される。(1) 幼児期の愛着が，その後のパーソナリティに圧倒的で決定的な影響を及ぼすという見解である（e.g.， 中野， 2019； 岡田， 2011； 岡田， 2013， 岡田，2016；岡田，2019)。(2) 愛着由来と目される特徴を障害（disorder）と称する主張である（e.g.， 米沢,2015；米沢，2018；米沢，2019；米沢，2020)。そこではAttention-deficit hyperactivity disorder（ADHD）やAutism Spectrum Disorder（ASD）といったDiagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders（精神障害の診断と統計マニュアル）に掲載されている神経発達障害群と比肩する障害として愛着障害という診断名が使用されている。(3)愛着を幼児期の問題に限定せず,生涯を通した対人関係から論じる見解である(e.g.,高橋，2010；高橋，2013)。このように，幾多の愛着論と多様な提言がなされている。しかしながら，これらの源流となっているのは間違いなくBowlby, J.の愛着理論である。本研究では，Bowlby, J.の主著を読み解き，彼が構想していた愛着理論を明確にする。そして現在提言されている思潮を検分することを目的とする。

２．Bowlby, J.とその経歴

最初にBowlby, J.の簡単な紹介を行う（黒田，1995)。英国の首都ロンドン北西部のハムステッドで誕生する。ハムステッドは，第二次世界大戦の悪化からFreud, S.がウィーンから亡命し，必竟の仕事を全うした地である。それ故，精神分析の創始者，Freud, S.の博物館がある。Bowlby, J.はロンドン大学の附属病院等で児童精神医学を学び，医師の道を志した。1937年にロンドン児童相談所に精神科医として勤務する。大戦後は，精神病理学や臨床心理学で有名なロンドン・タビストック・クリニックやタビスティック人間関係研究所に勤務する。このクリニックと研究所は，精神分析の理論と技法，特にFreud, S.の系列下の見地から研究と治療に取り組んでいた。Bowlby, J.のこのような経歴，彼の時代や影響を受けた学説は，愛着理論の構想と密接に関係している。とりわけFreud理論の影響は濃厚であった。

彼の研究とその方向を決定付けたのは，ある書籍の出版である（黒田，1995)。それは彼の主著の１つ『Maternal Care and Mental Health』である。これは1951年に国際連合の専門機関，世界保健機関（World Health Organization）から出版され，13ヶ国語に翻訳された。日本では黒田実郎氏によって『乳幼児の精神衛生』として1963年に和訳される。国際社会に極めて強いインパクトを与え，精神保健やその近接分野の一部でバイブルとされた。ここで彼は母性剥奪（maternal deprivation）の影響を主張する。具体的には，乳幼児と主な養育者の人間関係が親密かつ継続的で，両者が満足と幸福感にみたされるような状態を精神衛生の根本とする。その上で，生後3年間における母性的養育の喪失がその後の精神的不健康に対する最大の原因になるとした。この主張に対する波紋もまた絶大であった。1950年代後半からこの主張に対する様々な批判が起こった。それらに対する反論がBowlby, J.の三部作となる。すなわち，『Attachment and loss: Vol.1 Attachment and loss (1969)』,『Attachment and loss: Vol.2 Separation (1973)』，そして『Attachment and loss: Vol.3 Sadness and depression (1980)』である。我が国では，『母子関係の理論Ⅰ　愛着（1976)』,『母子関係の理論Ⅱ　分離不安（1977)』,『母子関係の理論Ⅲ　対象喪失(1991)』として和訳された。本稿では，『乳幼児の精神衛生』と三部作を対象として，Bowlby, J.が構想していた愛着理論とその成り立ちを限無く検証する[1]。

３．論争の発端：『乳幼児の精神衛生』

和訳は全186頁である。分量自体は，後の三部作の比ではない。第１部が『母性的養育の喪失による不幸な結果』，第２部が『母性的養育の喪失の防止』となっている。最も多く引用されているのが，Goldfarb, W.の論文である。育児と問題行動（Goldfarb, 1943)，幼い時の児童施設における育児の影響(Goldfarb, 1944;Goldfarb, 1945;Goldfarb, 1947)，家庭における育児と児童施設における育児に対するロールシャッハテストの結果（Goldfarb, 1947）等が論じられている。それらは現在も発刊されている『American

Journal of Orthopsychiatry』というジャーナルによって報告された。“Orthopsychiatry”とは，予防精神病学，或いは矯正精神医学を指す。この点から，初期の育児が後の精神的な健康に影響するといった主張が既に含意されていた。また，事項索引に頻出するのは，ソーシャルワーカー（Social worker）である。現在の日本では，社会福祉士（Certified Social Worker）と精神保健福祉士（Psychiatric Social Worker）を指す。いずれも社会的な困難を抱える者に対する対人援助の専門職である。これは国家や時代によって違いがある。そこで当時の英国におけるソーシャルワーカーを検証する。

概して，20 世紀は福祉国家成立の時期とされている（高田，2015)。20 世紀初頭，英国で多数のヘルパーが養成されるようになり，それらが後のソーシャルワーカーとなった。そして社会生活に困難を抱える対人的なケアが手厚くなった。このような取り組みは官民連携であった。さらに，救済ギルトという組織が立ち上がった。救済ギルドの急成長は，ヘルパーの提供とケースワークの徹底に繋がった（高田，2015)。とりわけヘルパーの意義と役割は重要であった。ヘルパーは施しを行う者ではなく，友人として助力を行う者といった位置付けになった。さらにヘルパーの活動は，家族を単位とした支援に重点が置かれた。すなわち，Bowlby，J.が生まれ育った国家と時代は，国家から市民まで一丸となって貧困と家族の問題に対する取り組みを強化した時期であった。

『乳幼児の精神衛生（1951 / 1963)』には，過去 25 年間の文献研究から考案した理論と記されている。過去 25 年間とは，英国が第一次世界大戦に多くの資源を注ぎ込んだが，大敗を喫した時である。経済に大きな打撃を受けたのみでなく，疫病が流行して多くの人が命を落とした時期でもあった。市民生活に及ぼした悪影響は計り知れない。そのような状況下，米国から始まった世界恐慌は英国にも波及した。そのまま第二次世界大戦が勃発して，1945 年に終戦となった。すなわち家族を失った者，想像を絶する貧困や多くの失業者，治安の悪化，食料の欠落と栄養状態の悪化，両親を失った子ども達，乳児院や施設に入った子ども達といった夥しい社会不安の中にあった時期を研究対象として理論を考案した。言い換えれば，近代における最も危機的で不安定かつ貧困な社会情勢下における，市民生活からデータが収集されたのである。

第１部『母性的養育の喪失による不幸な結果』は過去の調査や事例報告となっている。第２部で展開する理論を支える論拠の提示といった役割である。第１部の重要なタームは，母性的養育の喪失である。ここでいう母とは，生涯母親の役割を果たす人物のことを指す。一方，統計的な根拠を基に欠陥家庭（broken home）という概念の下で行われた研究は，親子関係の障害といった表現で読み替えが施されている。十分な説明はなされていないが，欠陥家庭とは学術的に適切ではない，それらは親子関係と表現する方が適切である，といったBowlby，J.の独断による。よって，上述したような悲惨な家庭や経済的な問題から厳しい緊張状態が続いた家庭等の研究も全て，親子関係，とりわけ母子関係の問題として扱った。その上で，母性的養育の喪失が及ぼす影響として諸々の報告を行った。それらは主に 3 歳までの幼児を対象としていた。施設で生活をした幼児，母親と死別した幼児に見ら

れる心身の健康の悪化を報告している。また，生後3年間を施設で過ごした幼児が，知能や読書能力，算数，社会的成熟度，モラルや道徳心に対する値が低いことも指摘している。これらは全て，母子関係の不十分が原因と解説している。こうして，複雑で多種多様な諸要因は全て母子関係の問題に一括された。家族を単位としたソーシャルワーカーの活動を目の当たりにしてきたBowlby，J.は母子の問題を特別視するようになっていた。それは家族の中でも，母性と父性を区分してその意義や役割を論じるFreud理論（Freud，1933 / 1973）の影響である。

第２部『母性的養育の喪失の防止』は主に理論的な考察である。結論としては，精神的な健康と不健康を決定付けるのは，母子関係という見解である。それが親密で継続的で，両者が満足と幸福感に満たされていることが精神衛生の基本としている。そして3歳までの幼児期が極めて重要となっている。その後，家庭崩壊の防止という章では，社会経済的援助，社会医療的，長期的な視点に立った社会の在り方等が論じられている。さらに，未婚の母親，母親となった未成熟な少女に対する問題の解決策を指摘している。その後も，代用家族として，養子縁組や養育ホーム等についてソーシャルワーカーの役割を挿入しながら，母子関係の問題の回避の方策を論じている。これらについては確かに，当時の時代精神が反映されている。同時に，Bowlby，J.が確かにその時代精神の影響を受けていることを標榜している。すでに述べたように，英国では救済ギルドの急成長と社会福祉に対する運動の高まりが進行中であった。2 つの世界大戦や世界恐慌によって混乱と無秩序となった社会に対する対応策は急務であった。これは英国に限った問題ではなかった。そして世界保健機関から『乳幼児の精神衛生（1951 / 1963)』が発行された。健康に関する国際機関から世界全体に対するメッセージと啓蒙として発信されたのである。ただ，煎じ詰めれば，戦前・戦中・戦後の荒廃期にみられた子どもの問題を十把一絡げに母子関係の問題としたことは否めない。

同時期，我が国も類似した状況にあった。逸見（1994)は，第二次世界大戦の敗戦直後，戦災孤児や浮浪児の問題が社会病理の一つであったと指摘している。彼らは憐憫・保護と治安維持の対象であった。戦災孤児や浮浪児は，空襲等により両親を失った子，日本の植民地・占傾地において孤児となった子，或いは引揚げの途上で孤児となった子の総称である。社会全体が貧困と強い喪失感，空襲による列島全体の荒廃，空襲や兵役による家族の死去といった問題と直面していたため，戦災孤児や浮浪児でなくとも，ほぼ全ての子どもは不良で不衛生な環境に置かれていた。このために政府は様々な対策を講じてきた。一例を挙げれば，農業の充実である（田林，2007)。主食の米やその他の野菜等の生産には，女性も重要な労働資源であった。他にも戦後の日本の復興には家庭を犠牲に滅私奉公していた者は多かった。それは農業に留まらず，林業，鉱業，漁業のような第一次産業，第二次産業，第三次産業に従事する場合も同様であった。

このような国際情勢の中で，『乳幼児の精神衛生（1951 / 1963)』の主張は諸刃の剣であった。犠牲になったり，犠牲にせざるを得なかったりした母子の重要性を訴えた点は有意

義であった。しかしながら，貧困や無秩序といった社会不安，それによってもたらされた家族内部の問題等，あらゆる不良が，母子関係の一点に集約された。しかもそれは，世界保健機関という当時の権威ある組織から提出された児童精神医学者による提言である。母親は幼児とその将来に関する責任と不安を一手に引き受けることになった。上記のような仕事に取り組む母親にとって重大な問題が突き付けられた。そうした中で反論も高まった。それは勿論，3 歳までの幼児期がその後に決定的な影響を及ぼすといった見解，及び子ども達の多種多様な問題の原因を母子関係に帰属した点である。世界は二群に分立した。まず，権威ある立場の発言を受け入れて，バイブルのように取り扱った群である。他方，幼児期の母子関係のみで将来が決定するという見地を素朴に受け入れなかった群である。この賛否両論と批判の高まりに対し，終止符を打つため出版されたのが，Bowlby，J.の三部作であった。

この三部作は，反論に対する反論であった。よって『乳幼児の精神衛生（1951 / 1963)』の主張を精査したり修正したりする方向にはなかった。批判された箇所に理論の補填を施して，持論を補強・強化した内容となっている。よって，3 歳までの母子関係の決定的な影響に一点の曇りもないといった論を増強している。三部作は全体で 1500 頁程度の大作となっている。主張の補強と強化には，その当時優勢であった理論，持論の展開に適した研究や理論が選択された。以下に，三部作の論点と理論的なフレームについて各巻の部や章を単位として全体を満遍なく精査する。

４．Freud，S.と同一の主張：『母子関係の理論Ⅰ　愛着』

最初に主張されているのは，やはり母性的人物の重要性である。具体的には，母性的人物の喪失は，他の要因との関連性の如何に関わらず，精神病理的な諸反応を引き起こすといった見解である。母性的人物の影響は，他の関与要因と比較して一方的で圧倒的といった見解を示している。加えて，他の関与要因とは独自に作用する根源的な影響を有する，とも主張している。以前にも増して，母子関係の重要性を強調している。確かにそれは『乳幼児の精神衛生（1951 / 1963)』と同じベクトルにあった。無論，この書籍の出版の意図を踏まえれば，当然の事であった。

さらにFreud，S.の精神分析に関するやや歯切れの悪い論を展開している。Freud，S.の研究や理論は，矛盾と不確かさによって議論の的となった。ある仮説は発展したが，ある理論は批判の末に全く無視された。自分の理論は既に確立された理論と相容れない点がある。そのためにいろいろな批判を受けている。自らの学説の中心概念はFreud， S.の主張とほぼ同じである，と述べている。これはFreud， S.の精神分析の中で，発展した点と持論が一致しているとは言っていない。それなら，当時支持された理論と相容れない，ということにはならない。よって，Freud，S.の精神分析の中で，強い批判を受けた点と自らの見解はほぼ同じである，と言を左右にしながら記している。これは，はしがきの末尾に，特に明記しておきたい点として記されている。敢えてこの説明を加えたことには，Freud，

S.の精神分析に対する強固な信奉が垣間見られる。この立ち位置がBowlby, J.の千思万考を抑制した。

第1部,第1章の本書の立場において,精神分析と自らの愛着理論の関係を論じている。精神分析は最終的な所産から過去に遡ってパーソナリティを回顧的に探究してきた。このような追想法によってFreud, S.は，後のパーソナリティに対する影響は，生後2歳から4歳頃（或いは5歳から6歳迄）が最も重要，そして神経症や同類の精神障害を引き起こす諸要因は，自我が弱く，未成熟であり，抵抗力がない幼児期に原因があると主張している。そして，神経症は初期の子ども時代だけに形成されると論じている。すなわち，成人期以降で神経症等の精神障害が生じたとすれば，それは幼児期に原因がある，とする思想である（Freud, 1939 / 2003)。一方，Bowlby, J.は自分が異なる立場にあると主張する。幼児期の回顧ではなく，幼児期の子どもを直接研究対象として，特定の状況下のパーソナリティ等の分析を行う，或いは，そのような研究結果を基に理論を構成していると述べている。

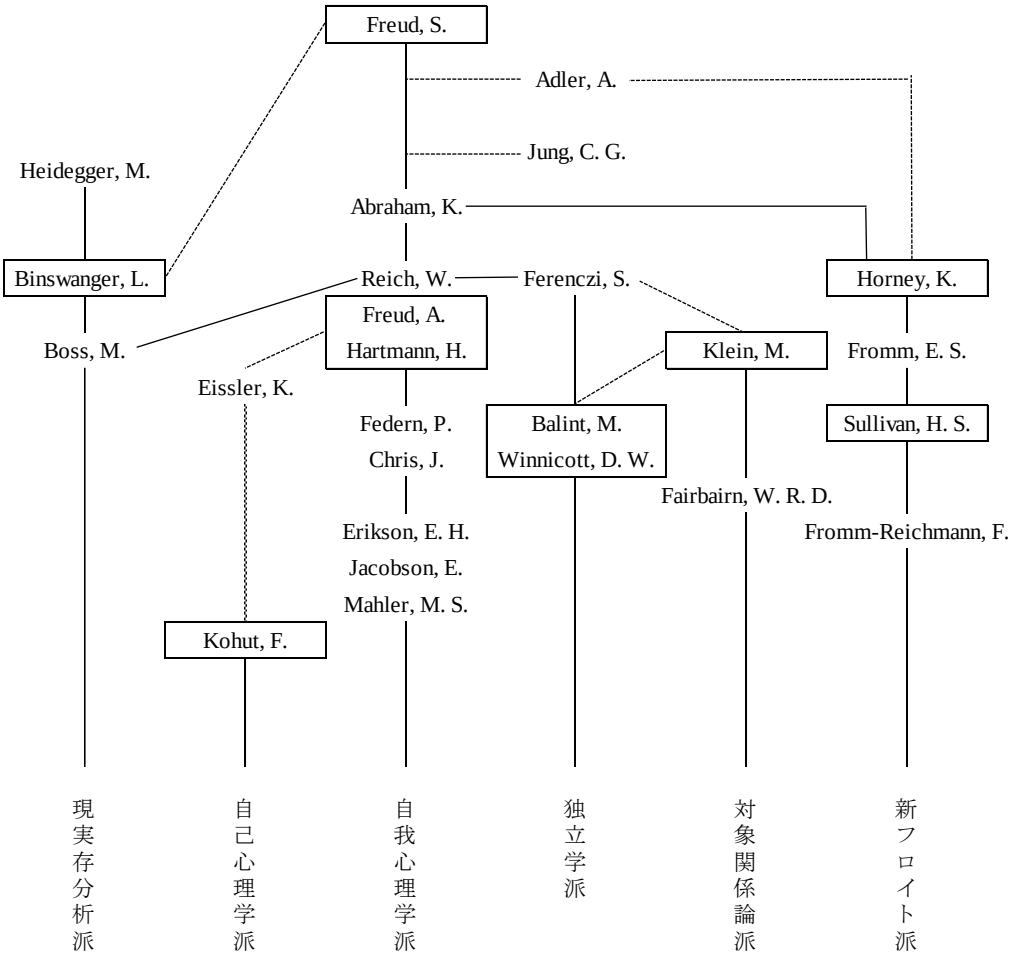

Fig 1 Freud, S.と精神分析学派の系譜

一見，Freud, S.等の精神分析と自らの愛着理論の相違が主張されている。しかしながら，実際の見解は相違ない。研究の方法が異なったとしても，研究の方向性も解明しようとする事柄も両者は同一である。つまり，幼児期の母子関係がその後のパーソナリティに決定的な影響を及ぼす，という結論を享有している。

同章でFreud, S.以降，最も影響のあった精神分析家を論じている。それらはMelanie, K.・Balint, M.・Winnicott, D. W. ・Fairbairn, W. R. D.の４名である。前田（1994）による精神分析の系譜を基にFig 1に整理した。縦の直線は直系，それ以外の線は派生を意味する。破線は離反や決別である。Balint, M.とWinnicott, D. W.は最も正統とは言えないが，Freud, S.の直系に近いことがわかる。Melanie, K.とFairbairn, W. R. D.はFreud, S.から離れている。Freud, S.の直系であるFreud, A.とMelanie, K.の間には論争があった。このため，離反した扱いになっているのだろう。しかしながらFreud, S.とMelanie, K.は理論上は類似していたという見解もある（下司，1999）。ここではその詳細まで論じない。ただ，Bowlby, J.がFreud, S.の理論の影響を強く受けていたのみでなく，その後の精神分析の研究と展開に関心を持って注視していたと考えられる。

実際の観察結果も挿入されている。まず，第二次世界大戦中のハムステッド保育園における幼児の分析が紹介されている（Burlingham, & Freud, 1942；Burlingham, & Freud, 1944）。なお，ここで引用されているFreudは，Sigmund Freudではなく，Anna Freudである。オーストリアのウィーンでFreud, S.の娘として生まれたFreud, A.は，戦局の悪化から英国の首都ロンドン北西部のハムステッドに父と共に亡命する。その地で行った戦時下の幼児の観察である。Freud, A.は父の意志を受け継いだ児童精神分析家である。なお，これらの論文の主眼は厳密に精査すれば，戦時中や家族がいない子どもであり，幼児期の母子関係ではない。つまり母子関係は調べておらず，戦中と戦後の子どもの調査となっている。これに加えて，Spitz, R. A.らによる施設で育てられた乳児の観察等も引用されている（Spitz & Wolf, 1946）。このSpitz, R. A.は，施設病（hospitalism）の考案者である（Spitz, 1945）。Spitz, R. A.は施設で生活する子ども達の心身の発育等を調べて，その著しい発達の遅れを明らかにしている。その上で，心身の著しい遅れは，施設で生活しているため，と指摘した。それが施設病の端緒である。しかしながら，施設で生活することではなく，十分な母性的な愛情の欠如によって生じるものと解明され，施設病という概念は立ち消えとなった。施設病の提唱も含めてSpitz, R. A.の研究は『The psychoanalytic study of the child』，『Psychoanalytic Review』，『Journal of the American Psychoanalytic Association』等の精神分析に関する専門誌に掲載されている。このように見てみると，挿入された観察データは，精神分析の臨床家によってなされたことがわかる。また三部作の第一巻においても，引用された子どもや家族の調査結果は，母子関係に読み替えられている。

第２部では，主に比較行動学の知見を引用しながら本能について論じている。ここでも，冒頭でFreud, S.の見解が繰り返し述べられている。そして，精神分析と比較行動学を比

較する。精神分析は不明な点の解明において，付加的な種類のデータを使用する。それは対象から報告された思考や感情である。一方，比較行動学ではそのようなデータは使用しないと言及する。当時次々と発見される動物（トリ，ネズミ，サル等）の研究よりも，精神分析の方が包括的に現象を捉える方法論を持っているという主張である。いわゆるサイエンスとしての比較行動学の緻密な知見を厳然と整備した上で，それよりも精神分析の方法論は包括的で勝っているという論理構成にも見える。比較行動学の知見として引用した一例は，ノーベル賞を受賞したLorenz，K.の刻印づけ(imprinting)である(Lorenz，1957)。なお，実際に引用されているのは，ドイツ語で最初に発表した1935年の書籍である。一部の鳥類の中で，卵から孵化してから一定の時間に見た動くものを追いかけるようになるといった現象である。それは敏感期(sensitive periods)と呼ばれ，一定の時期を逸すると，機構が発動しない，といった研究である。この種の知見は，幼児期という限定的な期間が決定的な意義を持つことを論じる上で，極めて便利がよかった。その他にも比較行動学の知見を数多く引用しながら，第3部で展開する人間の愛着に関する議論の理論的基盤を作り上げる。

第３部は心理学の概論書等にしばしば記されている内容である。Harlow，H. F.やAinsworth，M. D. S.の研究が紹介されている。Harlow，H. F.については，サルを被験体としたモデル・マザーの実験である（Harlow & Zimmermann，1959)。母ザルから分離させた子ザルを対象に，モデル・マザーを用意する。それは両方ともミルクを飲むことができるが，一方は針金で作られており，他方は柔らかい布で作られている。食物は愛着をもたらさないが，快適な接触は愛着を発生させることを明らかにした。これはそもそも，米国発祥の行動主義や新行動主義という研究方法と思考様式が，乳幼児は愛情を持たないと断言したことと深く関係している。それに対するアンチテーゼがHarlow，H. F.の研究である。一方，Ainsworth，M. D. S.の初期の研究は，主にアフリカの子ども達の観察である。それらは，欧米諸国と生活習慣の異なる母親と子ども達がどのような愛着を形成しているのか観察した報告であった。人間の乳幼児が年齢に伴って母親にどのような反応を示すか，母親の行為によってそれがどのように変化するか報告されている。

第４部は，人間における愛着の個体発生である。ここではまず，愛着の起源が論じられている。かつて米国で隆盛した行動主義・新行動主義の見解が再び取り上げられる。それは，人間は遺伝の影響を受けず，生後の経験によって全てが決定するといった見解である。この見解は，英国の経験主義を少し変容して解釈し，乳児は白紙の状態と論じていた（村田，1992)。Bowlby，J.はこれを否定する。泣き叫び・吸引・しがみつき・定位と関わる原始的システム，微笑や喃語，歩行といった後に組織化されるシステムは生得的とする。つまり，生まれながらにして特定のシステムが装備されていると言う。そして，それを土台として，愛着が形成されると指摘した。その上で，より具体的に母親に対する発信がどのように変化するか，人に対する反応の変化について段階的な例示と説明を行った。第３部と第４部は，概論書等にしばしば記されている内容である。換言すれば，第１部と第２部

にこそ，Bowlby，J.の愛着理論の本質が明確に表れている。よってここを精読することによって彼の愛着理論の一端を正確に捉えることが可能となる。

５．Freud，S.に僅かな批判：『母子関係の理論Ⅱ　分離不安』

第１部は『安定，不安，苦悩』，第２部は『人間の恐怖に関する比較行動学的研究』，最後の第３部は『恐怖に対する敏感性の個人差』となっている。はしがきには，再びFreud，S.やその学派とは異なることが主張されている。具体的には，研究の初期はFreud，S.の精神分析の枠組の中で研究が開始されたが，その後の研究によってそれらと多くの点で齟齬が生じるようになった，と記されている。その事実は，第１巻の第１章，及びこの第２巻の第２章，第５章，第16章において詳細に述べられている，と付言されている。しかしながら本巻でFreud理論のラディカルな批判には成功しなかった。

まず，第１巻の第１章については，既に論じた通りである。Freud，S.の見解は，青年期や成人期以降のパーソナリティの問題は，全て幼児期の母子関係が原因であるという主張である。一方，Bowlby，J.は，幼児期の母子関係が青年期や成人期以降のパーソナリティに影響を及ぼす，といった主張である。幼児期の母子関係を分析している点が異なっていると記述している。しかし換言すれば，青年期や成人期の生活習慣は子どもの頃の生活習慣の影響を受ける，という見解と子どもの頃の生活習慣は青年期や成人期の生活習慣に影響を及ぼすといった違いである。生活習慣の連続性を論じている点で，本質的な差は見当たらない。よって，Freud，S.やその学派とBowlby，J.の見解は，仮に贔屓目に見積もったとしても相違点よりも共通点の方が明らかに多い。『母子関係の理論Ⅱ　分離不安』の人名索引を概観してみると，圧倒的多数を占めるのが，Freud，S.である。次がMelanie，K.である。そしてMelanie，K.については批判が散見される。しかしながらこれは，精神分析の学派における理論の相違点の論議である。あくまで，精神分析の枠の中で行われるディスカッションである。つまり，精神分析の内部の議論であり，精神分析のフレームの外部の立場や見地から論議していない。

この第２巻の第１部は『安定，不安，苦悩』である。第１章では母親からの離別が乳幼児に及ぼす影響について事例を挿入しながら論じている。例えば乳児院や養護施設の子ども達が担当の保母に強い独占欲や嫉妬心のみでなく，敵意を示したり拒絶したり情緒的脱愛着（emotional detachment）を示す例が挙げられている。この章では，乳幼児期の母子分離が極めて危険という点が強調されている。但し，危険の具体は不明瞭である。第２章では僅かにFreud，S.やその学派との違いが触れられている。母子分離の研究から，抵抗（protest），絶望（despair），脱愛着（detachment）といった一連の反応が生起することが明らかになった。精神分析の研究では，抵抗は分離不安，絶望は悲嘆と悲哀，脱愛着は防衛の問題とされている。そして，精神分析では，防衛，悲嘆と悲哀，分離不安といった順序で見出されたこと，そのために３つの概念が別個の問題になっていると指摘する。この点が，Bowlby，J.の母子関係の理論と異なると主張している。但しこれも，先に指摘し

た事柄と密接に関係している。発達の順序性を自然な時間の流れで追跡したのが Bowlby, J.である。発達の順序性を不自然に遡って追跡したのがFreud, S.である。このため,Bowlby, J.は一連の反応の順序をそのまま並べることが可能であった。一方，Freud, S.は，一連の順序として提示できず，一つ一つを個別に扱った上で，それらの関連性を個々に論じていくことになった。両者が求めていた者は同じであった。ただ，手続きが異なったため，地均しに要不要が生じた。このように考えると，やはり Bowlby, J.と Freud, S.は近似している。

第３章において Ainsworth, M. D. S.のストレンジ・シチュエーションの研究が紹介される。子どもが母親と分離したり再会したりする場面を設定し，その時々の子どもの様子を観察する。さらには，分離の後に見知らぬ女性が近づいてくる場面も含まれる。ストレンジ・シチュエーションは Ainsworth, M. D. S.の研究として広く理解されている。ところが，類似の方法による研究は複数の研究者によって着手されていたことがわかる。さらに，ストレンジ・シチュエーションによる研究の初期は，1 歳から 4 歳頃の年齢による反応の違い，男児と女児の違いの比較，幼児の反応の文化差等が研究テーマであった。引用している研究は,主に 1960 年代後半から 1970 年代初頭である。なお,ここでは Ainsworth, M. D. S.の研究の明確な出典が示されてはいない。彼女は後に母親や見知らぬ人と分離・再会する場面における幼児の反応から愛着スタイルの分類を行い，その成果を書物にまとめる。愛着スタイルとは,よく知られる安定型,回避型,アンビバレント型である(Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。

Ainsworth, M. D. S.の研究は，愛着スタイルの分類・カタログ化に進行していった。一部の研究は，愛着スタイルを含めて幼児期と成人期の連続性を声高に主張するようになった。本当にそれが真実なら，多くの問題が問題ではなくなる。すなわち，幼児期だけを大切にした育児や教育を行えば,その後の心配はかなり消失することになる。幼児期以降は，さほど影響を持たないため，後の影響もクライシスもあまり気にしなくてもよい。後述するが現実はそうではない。一方，少なくとも初期の Ainsworth, M. D. S.の研究は，他の研究と同様，分離と再会は年齢によってどのような違いをもたらすかといった発達のプロセスに関心を持っていたことがわかる。つまり，Ainsworth, M. D. S.自身は幼児期と成人期の連続性に関心はなかった。

第２部は『人間の恐怖に関する比較行動学的研究』である。ここには極めて興味深い議論がある。それは，Freud, S.の言説を確かに批判した箇所である。第５章である。具体的には，乳児が母親の存在を重視するのは，自分の欲求を満たしてくれるため，といった Freud, S.の見解である。この見解が，二次的動因説と一致していることが批判となった。特定の対象と築く情緒的な絆の実在とその提唱者である Bowlby, J.にとって，Freud, S.によるこの見解は容認できなかった。二次的動因説とは，既述した行動主義・新行動主義の見解である。これは人間の高次精神活動も含めて，あらゆる精神機能を全て条件づけによって説明しようとする，或いはできると主張してきた。それは人間を機械と同等に見な

す思想であった（水口，2020；村田，1992）。

二次的動因説は，乳幼児の愛情を認めない。乳幼児とその母親には愛情や情緒的な絆は本来的に存在しないとする。食物をくれたり不快を取り除いたりする経験を繰り返すことによって，条件づけが成立して副次的に乳幼児が接近するようになると主張する。Bowlby, J.は，行動主義の創始者 Watson, J,の研究に関する批判も行った。出典は明確にされていないが，1920 年に Watson, J.が行った取り組みと実験を引用している。生後 11 ヶ月のアルバート坊やに対して，白いネズミを見せると同時に鉄棒をハンマーで叩いて大きな音を聞かせた。これを何度も繰り返すと，この乳児は白いネズミを見ただけで恐怖を感じるようになった。いわゆる条件づけである。そして般化によってウサギ，アザラシの毛皮，人間の髪も恐れるようになった，と紹介している。その上で，この研究と結果の解釈に関する問題点に言及している。この乳児は，“誕生時からほとんど病院で育てられた”という点，この研究対象に選ばれたのは，彼が“鈍重で無感動”と周囲に認識されていたことを指摘している。これは Bowlby, J.らしい着眼点である。さらには，実際には恐怖の条件づけ反応は得られなかったため，ほぼ強制的に恐怖を誘発したといった研究上のクリティカルな指摘も取り上げられている（Marks, 1969）。

Freud, S.は膨大な研究により，人文諸科学の思想や哲学に影響を及ぼす巨大な足跡を残した。よって Freud, S.の著作の一節を批判したとは考えにくい。勿論，数値的データを持ち出しても言語的ロジックを駆使しても，最終的には言説の主張を行う点では違いも優劣もない。よって研究上の論争において言葉の選択に誤りがあれば，決定的な致命傷となる[2]。それは Freud, S.の著作も同様である。ただ，本能等を論じる Bowlby, J.の根底に流れる人間観を鑑みると，遺伝や本能が人間に及ぼす影響は皆無と断言した行動主義・新行動主義による二次的動因説への強い批判が先立っていたと推測される。

第２部のさらに興味深い点は，Darwin, C.による進化論の論議である。19 世紀以前から精神の個体発生を研究する社会的風潮は存在した（村田，1992）。それは，科学革命期の知的雰囲気に加えて，哲学・文学・神学の領域でもあった。18 世紀中期以降から理論を伴った視点を持って議論がなされるようになった。村田（1992）によれば，個体発生の最も深層で関わる哲学思想と科学思想をもたらしたのがダーウィニズムであった。但し,『種の起源（1852 / 1952)』が公刊された 1852 年頃，欧州はキリスト教の思想の影響が圧倒的であった。神の被造物である人間が，その祖先を猿とする論は批判的に受け止められた。このため，進化論の浸透と伝播の速度は極めて緩慢であった。但しいつしか，科学や思想の基礎となっていく。Bowlby, J.は，Freud, S.の研究の基本的なモデルには，Darwin, C.の思潮の影響を受けていなかったと指摘する。一方，自身の愛着理論は現代的な進化論に基づいていると主張している。それ故に，比較行動学等から得た本能や生物の複雑な行動システムに関する知見が多く引用されている，といった論を展開している。恐らく『母子関係の理論Ⅱ　分離不安』の構想を描いている時期は，Darwin, C.の進化論が科学のコミュニティにおいて極めて重要な発見という評価が定着してきたのだろう。そして多くの科学者

と同様，Bowlby，J.もその影響を受けたと考えられる。理論上のグラウンドに相違があったとしても，Bowlby，J.とFreud，S.の結論は酷似している。すなわち，乳幼児と成人の連続性である。ただ，その後の研究の発展を考えると，進化論を取り入れたBowlby，J.の見解は，隣接領域と結節点を増加させやすかった。また進化論の取り入れは，遺伝や本能を否定する行動主義や新行動主義の二次的動因説と相容れなかった理由であろう。

第３部は『恐怖に対する敏感性の個人差』である。ここで有名な作業モデル（working model）の詳細が明らかになる。作業モデルとは，自分の愛着対象が誰でどこにいるか，そして自分の行為に対してどのような反応を返すかといった心内のモデルである。より具体的には接近しやすく，応答してくれるか，その予測である。そしてやはり，作業モデルが3 歳までに形成されること，一度形成されると大人になるに従って，このモデルの重要性が一層強まっていくと論じている。ここでもFreud，S.の見解を持論の妥当性の補強に引用している。一点興味を引くのは，Piaget理論に言及していることである。作業モデルの構想には，表象機能が形成されて，それが“今ここ”といった時空を超えた思考を可能にしていくとするPiaget，J.理論に共鳴したのだろう。但しPiaget，J.は主に知能の発達を理論化した発達心理学者である。子どもの精神保健や精神病理を研究したBowlby，J.とは学術上，直接的な関係はない。ただPiaget理論の表象に関する見解に注目して，類似したフレームを構想したのかも知れない。

また，興味深い記述もある。それは自閉症（現在のAutism Spectrum Disorder）について述べた箇所である。自閉症の原因は，(1)遺伝的要因，(2)脳損傷，(3)不適切な母性的養育のいずれかの要因と記している。現在，自閉症は生まれながらの脳の機能の仕方の問題というのが共通見解である。ところがこの見解に至るまで，親の養育の仕方によるといった説，必ずしも妥当ではない精神分析の説によって混乱していた。誤った見解と理論によって，不毛な議論と多くの犠牲を生み出していた。自閉症に関するBowlby，J.の指摘は，当にこの誤った見解と一致している。これには戦争も関与している。自閉症が初めて報告されたのは，第二次世界大戦の末期であった。このため，十分な検証を進めることができなかった。原因が明確になったのは 1964 年に英国で実施された疫学調査である（片桐，2011）。それらの研究結果から，児童精神科医のRutter，M.が自閉症は脳の機能障害といった報告を行った（Rutter，1968）。1973年にこの第２巻を出版したBowlby，J.は，同じく児童精神科医であった。このため，自国内で進められていた調査とその結果は見聞していたと推測される。当時Bowlby，J.は国際的に注目されていた児童精神医学者である。新進気鋭と目す見方もあっただろう。それにしては，自閉症の原因に対して不用意な言及であった。この点も精神分析や自身の母子関係の見解に偏重していたためと考えられる。

さらに，Freud，S.の事例を取り上げている点も特記に値する。これが16章である。精神分析において重要な意義を持つ『ハンス』の症例報告である（Freud，1909 / 1969）。4歳頃から馬に噛まれないかといった恐怖を抱くようになった子ども,それがハンスである。この恐怖の実態は，父親に向けられた憎しみと母親に対するサディズムの２つを含む攻撃

的衝動が，抑圧され投射された結果と分析した。いわゆるエディプスによって説明している。ハンスは馬を怖がっているのではなく，母親が彼を置き去りにしていってしまうことを恐れている，と分析した。このような症例報告を取り上げて，Freud, S.の再評価を行っている。精神分析においてエディプスとは，幼児期男児の幼児性欲とされる（前田，1992）。母親を独占したい，そして父親を憎み競争しようとする，故に，父親に罰せられる恐れを抱くといった観念複合体である。『ハンス』もエディプスも，幼児性欲の理論的支柱を為す。ところがこの幼児性欲は同じ精神分析の臨床家においても受け入れられなかった。例えば，Fig 1のAdler, A.やJung, C. G.といったFreud, S.の初期の弟子は，幼児性欲の考えを受け入れられず離反した。一方現在，Freud, S.の研究は，臨床心理学において枢軸ではなくなっている。但し，言語や構造に関する思想や哲学においては現在も有意義な存在である。このような観点からのエディプスの議論は，Deleuze and Guattari (1972 / 2006)のような他の良書に譲る。幼児性欲やエディプスが，提案後も一定の時間が経過しても批判がなされていることは，Bowlby, J.も理解していた。それにも関わらず，Freud, S.の理論が持論と酷似するため引用したと推測される。結果この章もFreud, S.の批判となっていない。

６.『子ども』概念の拡張：『母子関係の理論Ⅲ　対象喪失』

第１部は『観察・概念・論争』である。ここで初めて脱愛着（detachment）に関する正式な説明がなされる。脱愛着については，これまで何度か記されていたが，状態を素描するに留まっていた。脱愛着とは愛着対象からの離脱を意味する。具体的には，生後６ヶ月から３歳児が母親から引き離された後，特定の代理養育者に保護されない状態が１週間或いはそれ以上続いた場合に生じる。それは母親と再会しても愛着を全く示さないことが特徴とされている。母親と離別した時間と脱愛着は高い相関があると記されている。この愛着対象の喪失が精神分析の学派によってどのように説明されてきたのか詳細に記述されている。結論としては，親の喪失は分離不安や悲哀のみでなく，再会を目指す攻撃性を含んだ悲哀も存在するとした。ここで幼児期に先鋭化してきた議論の矛先に変化が生じる。脱愛着の研究報告から，愛着の影響は幼児期から数年に限定するものでなく，青年期も含まれると論調を変転した。Bowlby, J.はこの段になって，愛着対象の喪失は青年にも影響をもたらすと論じ始めたのである。

第２部は『成人の悲哀』である。ここではFreud, S.や精神分析から離れて，様々な研究が紹介されている。まず配偶者の喪失の精神状態である。それがどのような精神状態を引き起こし，共通してどのような段階を経て変化するのか，多くの調査を引用しながら論じている。また，致死的疾患に罹った子どもの親，死産や早期死亡時の親等も豊富な調査結果が引用されている。日本を含めた他の文化圏の悲哀に関する研究についても論じられている。これまで専ら幼児の問題について論議してきた。ところが，この第２部では成人における喪失や脱愛着が精神状態に及ぼす極めて豊富な研究を紹介している。

この第２部はBowlby, J.にとっても極めて意義深い議論の場であった。Freud, S.から離れた，成人の悲哀に関する多くの研究から構成されている。恐らくそれは，二つの世界大戦とその後の影響をトリガーとした研究の一塊であったと推測される。つまり，戦争と貧困，混乱や病から，多くの人が命を落とした時代があった。それは当然，子どもだけではなかった。配偶者や同胞，親や親族等，ありとあらゆる不幸があっただろう。それらの影響が精力的に調査された時期であった。それらの研究結果を調べる中で，Bowlby, J.は愛着対象を失うことは，乳幼児だけの問題ではないと思案したのだろう。そして，この『成人の悲哀』の部が構成されたと考えられる。この第２部を組み込むことで，既述したように愛着対象の喪失は青年にも影響をもたらすといった所論になった。つまり，3 歳，或いは５歳までの幼児に限定していた愛着理論の箍を緩めたのである。Freud, S.に固執していた愛着に関する見解から離脱した。すなわちこの議論は，反論に対する反論に留まらない持論の修正である。それは事実に忠実であろうとする研究者のあるべき姿勢であった。

第３部は『子どもの悲哀』である。ここでいう『子ども』は，児童期と青年期を指している。年齢に関する明確な定義はないが，青年については青年後期という区分も見られる。愛着対象の喪失に関する研究結果を引用している。数多くの調査結果や事例があるが，それらを整理すると，17 歳以上を対象とした調査も掲載されている。後述するErikson, E. H.によれば，20 歳を迎える迄を青年期としている。少なくともこの時期辺り迄が青年期だろう。Bowlby, J.の三部作は，『Maternal Care and Mental Health』における主張の理論武装から始まった。生後 3 年間における母性的養育の喪失が精神的不健康の最大の原因という主張の補強と強化が目的であった。第１巻と第２巻は確かに主張に変化はなかった。ところがこの第３巻から変動する。青年期や成人の愛着対象の喪失や脱愛着を論じてその影響を取り上げるようになった。また第１巻と第２巻は，『子ども』と書いて論じるのは，幼児であった。ところが，ここでは『子ども』と書いて，幼児期，児童期，青年期のことを指している。加えて，成人期以降の議論も加算した。これはBowlby, J.の研究文脈において新境地である。

Bowlby, J.は『母子関係の理論Ⅰ　愛着（1969 / 1976)』,『母子関係の理論Ⅱ　分離不安（1973 / 1977)』,『母子関係の理論Ⅲ　対象喪失（1980 / 1991)』といった時期に書籍を発刊してきた。この分量と期間から推測するに，全てが最初から綿密に構想済ではなかったと考えられる。恐らく最初の書は，『乳幼児の精神衛生（1951 / 1963)』の論旨と論調のままであっただろう。しかしながら，調べながら書にまとめる過程で，初期の構想の勢いが維持できなくなった。そして最後の書では，幼児期の限定を解除した。但し，三部作に一貫性を持たせる必要もあった。このため，児童や青年を論じながらも，それらを『子ども』と表記したのかも知れない。今現在，4 年制大学の学生を『子ども』と見なす社会的風潮はあるかも知れない。発表されたのが 1980 年であれば，『母子関係の理論Ⅲ　対象喪失』の執筆時期はそれより少し前であろう。今から約 40 年以上前の 18，19 歳は『子ども』と見なすような存在ではなかったと考える。少なくとも，現代よりはそのような風潮は少

数であっただろう。結局，後期になってBowlby，J.は初期の構想から脱却した。

ここでBowlby，J.の愛着理論を初期・中期・後期に分類することを試みる。少なくとも『乳幼児の精神衛生』や『母子関係の理論Ⅰ　愛着』を執筆していた時期は，生後3年間の母性的養育の喪失を殊更に強調していた。これは初期と位置付けられる。『母子関係の理論Ⅲ　対象喪失』では，成人期以降の愛着も論議されるようになった。この変化は『母子関係の理論Ⅱ　分離不安』の執筆中であったか，それ以降であったかは，定かではない。Bowlby，J.の見解に変化が生じ始めた時期を中期と位置付けるが，その時節の明示は容易ではない。但し『母子関係の理論Ⅲ　対象喪失』を出版した時期は，Bowlby，J.の愛着理論の後期と呼ぶことが可能だろう。

７．Bowlby，J.の愛着理論の特徴

この理論の構成上，極めて重要な役割を果たしているのは，Freud，S.である。彼の精神分析を引用しない章は皆無に等しい。幼児期の母子関係と青年期や成人期以降のパーソナリティの連続性を主張する時，近似した論を展開していたFreud，S.は必然的に引用頻度が多くなった。そして，持論の妥当性の証明においてもFreud，S.は適格であった。Freud，S.の言説を批判することもあった。また，Bowlby，J.が展開する愛着理論の末尾において，問題を幼児期に限定しなくなった兆しもあった。但し，全体を通してFreud，S.とその考えを継承する精神分析学派の影響は極めて大きかった。

Freud，S.の影響は個人的見解の一致だけではない。Bowlby，J.の境遇も作用した。彼が生まれたロンドンのハムステッドには，フロイト博物館があった。精神科医となってから勤務したロンドン・タビストック・クリニックやタビスティック人間関係研究所は，Freud，S.の精神分析の研究に没頭していた。Bowlby，J.の日常は，Freud，S.と密接な関りがあった。その影響がいつからであったか，判別することは不可能である。ただ，40歳代で世界保健機構から『乳幼児の精神衛生』を出版した後，国際社会から厳しい反論を受けた。その時，自分や職場の同僚が強く信頼していたFreud，S.の精神分析は，Bowlby，J.の心の支えですらあったのかも知れない。そのため，Freud，S.に対する信仰にも似た固執となったのだろう。

８．Bowlby，J.の愛着理論の再編成

彼の愛着理論からFreud，S.の見解を取り去る必要がある。つまり，生後3年間における母性的養育の喪失が精神的不健康の最大の原因としないことである。この点が，多くの批判を集め，混乱を起こした。もっとも，これはBowlby，J.自身が第3巻において修正を始めた点である。愛着の問題は，幼児期に限定されるものではない。児童期や青年期，さらには成人以降も変わらない。幼児期と成人期以降の愛着の連続性もFreud，Sの理論と密着に関わっている。これを鵜呑みにできないことは簡明である。代替案となるのは，Hall，G. S.の研究である。発達研究におけるHall，G. S.の貢献は，Piaget，J.と匹敵する（村

田，1992)。Hall，G. S.は発達段階を乳幼児期，児童前期，児童後期，青年期，成人期に分類した。そしてそれぞれの時期の特徴を研究した。結果，パーソナリティが最大の変化を受ける時期として青年期を挙げている（Hall， 1904）。そして青年期を “疾風怒涛（strum and drank）の時期” と呼んだ。この見解を引き合いに出せば，少なくとも幼児期にパーソナリティの大部分が決定するとはならない。これはBowlby，J.の愛着理論からFreud，Sの見解を抜き取る意義の学術的論拠である。

それは，Freud，S.の直系の研究からも妥当と言える。Fig 1のFreud，S.の系統において，その系列化にErikson，E. H.が位置づいている。同じ精神分析学派であるが，生涯の発達の節目となる時期に乗り越えるべき課題があることを主張した（Erikson，1959 / 1973)。当然，幼児期に偏重していない。彼は生涯に渡る心理社会的発達の八段階説を唱えた。人生のどの時期にも乗り越えなければならない発達課題があること，そして乗り越えられない場合,クライシスを迎えると論じた。発達のどの段階にもクライシスが生じうる。幼児期だけに決定的な問題があるわけではない。幼児期にも課題はあるが，それは母子の愛着関係とはされていない。そして現代の発達研究はErikson， E. H.と同じ志向にある。もはや敢えて使用されないが，人生全てを視野に入れた生涯発達心理学が発達研究の一般的な見解である。つまり，生命を持つものが変化し続ける全て時期が，発達研究とその理論化の対象となる。よって青年期やそれ以降についても愛着理論は適用される。このように第３巻に込められたBowlby，J.の変化や意図を読み取り，それに向かって理論を再構成する研究が一つの正当な在り方だろう。

９．結論

Bowlby，J.の主著を読み解き，彼が構想していた愛着理論を再分析した。結果から次のような結論が導き出された。最初に述べたように現在，(1) 幼児期の愛着が決定的な影響を持つと主張する見解がある。これは精神科医や臨床心理学の一部から提案されている。Bowlby，J.による愛着理論の原典に立ち返ると，彼の初期の見解と一致している。既述したように，後期Bowlby，J.は愛着を乳幼児期に限定することを止め，広く生涯に関わる事項とした。よってこれは，初期Bowlby，J.の見解と言えよう。次に，(2) 特別なニーズを持つ子どもの支援を行う立場からの提言である。発達障害児の支援の実践から,ADHDやASDと同列に，愛着障害というDisorderが提案されている。これはBowlby， J.の愛着理論の直系ではなく派生である。Bowlby，J.の書籍の中に愛着障害という用語は出現しない。これが Disorder として確立されるには，国際的な規模で多角的な疫学調査と実証が必要だろう。そのような手続きによって正式な診断名となれば，治療法等が万国で共有される。そして効果的な支援の開発も急進する。さらには，福祉的制度等の支援・支給対象とされる可能性もある。最後に (3) 愛着を生涯の人間関係に位置付ける立場である。これは発達心理学の立場から提案されている。既に述べたように後期Bowlby，J.は愛着理論の射程を子どもから青年，成人以降に拡張した。よってこの見解はBowlby，J.が構想した愛着理論

の直系と言える。そして発達研究としての愛着理論の至当な後継でもある。無論，Bowlby, J.が提唱した愛着理論は，以後に多種多様な加筆修正も行われている。それらは本稿の冒頭に示したレビュー論文等を参照されたい。ただそれらを的確に理解・評価するには，Bowlby, J.のオリジナルの愛着理論を踏まえておく必要があるだろう。

文　献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., Waters, E., & Wall, S. (1978) *Patterns of attachment: a psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Burlingham, D., & Freud, A. (1942) *Young children in war-time*. Allen & Unwin.

Burlingham, D., & Freud, A. (1944) *Infants without families*. Allen & Unwin.

Bowlby, J. (1951) *Maternal care and mental health*. World Health Organizations (黒田実郎（訳）(1963) *乳幼児の精神衛生*　岩崎学術出版)

Bowlby, J. (1969) *Attachment and loss: Vol.1 Attachment and loss*. New York: Basic Books.（黒田実郎・ 大羽　蓁・岡田洋子（訳）(1976) *母子関係の理論Ⅰ　愛着*　岩崎学術出版社)

Bowlby, J. (1973) *Attachment and loss: Vol.2 Separation*. New York: Basic Books.（黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）(1977) *母子関係の理論Ⅱ　分離不安*　岩崎学術出版社)

Bowlby, J. (1980) *Attachment and loss: Vol.3 Sadness and depression*. New York: Basic Books.（黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）(1991) *母子関係の理論Ⅲ　対象喪失*　岩崎学術出版社)

Darwin, C. (1859) *On the origin of species*. Murray （八杉龍一 (1952)（訳）*種の起源*　岩波書店)

Deleuze, G., & Guattari (1972) *L'Anti-Oedipe*. Paris: Editions de Minuit.（宇野邦一（訳）(2006) *アンチ・オイディプス　上下*　河出書房新社)

Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*. International Universities Press, （小此木啓吾（訳）(1973) *自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル* 誠信書房)

Freud, S. (1909) *Analysis of a Phobia in a Five-year-old Boy. Standard Edition, Vol.10*. (Strachey J. Trans). London: Hogarth Press, pp3-149, 1955. 懸田克躬・高橋義孝訳 (1969)：*ある五歳男児の恐怖症分析 フロイト著作集５* 人文書院 pp173-275.

Freud, S. (1939) *Moses and monotheism*. Knopf（渡辺哲夫（訳）(2003) *モーセと一神教* ちくま学芸文庫)

Freud, S. (1959) *Inhibitions, symptoms, anxiety* (Strachey, J. Ed., & A. Strachey,

A Trans). New York: Norton. (Original work published 1926)

Freud, S. (1964). *New introductory lectures on psychoanalysis*.(Stachey, J. Trans.). New York: Norton, W. W. (Original work published 1933) (懸田克躬(訳) (1973) *精神分析学入門* 中公文庫)

下司　晶 (1999) アンナ・フロイトーメラニー・クライン論争ー精神分析の分岐点としての児童分析. *教育哲学研究*, 79, 93-109.

Goldfarb, W. (1943) Infant rearing and problem behavior. *American Journal of Orthopsychiatry*, 13, 249-265

Goldfarb, W. (1944) Effects of early institutional care on adolescent personality: Rorschach data. *American Journal of Orthopsychiatry*, 14, 441-447

Goldfarb, W. (1945) Psychological privation in infancy and subsequent adjustment. *American Journal of Orthopsychiatry*, 15, 247-255

Goldfarb, W. (1947) Variations in adolescent adjustment of institutionally-reared children. *American Journal of Orthopsychiatry*, 17, 449-457

Goldfarb, W. (1949) Rorschach test differences between family-reared, institution-reared, and schizophrenic children. *American Journal of Orthopsychiatry*, 19, 624-633

逸見勝亮 (1994) 第二次世界大戦後の日本における浮浪児・戦争孤児の歴史　*日本の教育史学*, 34, 99-115

Hall, G. S. (1904) *Adolescence: its psychology and its relations to physiology and anthropology, sociology, sex, crime, religion, and education, 2 vols*. Appleton.

Harlow, H. F., & Zimmermann, R. R. (1959) Affectional responses in the infant monkey, *Science*, 130, 421-432.

平野慎太郎 (2015) アタッチメントと反社会性:その理解と支援. *甲南大學紀要*, 文学編, 165, 211-225.

片桐正善 (2011) 自閉症の定義における「社会」概念の変遷についてースペクトラム概念の可能性に照準してー　*応用社会学研究*, 53, 171-189

川島雅子 (2016) 乳児院入所児の愛着の形成・修復を担う直接処遇職員への支援の必要性. *神奈川工科大学研究報告.A,人文社会科学編*, 40, 11-20.

工藤晋平・淺田 (平野) 慎太郎 (2017) アタッチメントの観点から非行・犯罪をモデル化する. *心理学評論*, 60, 140-162.

黒田実郎 (1995) ボウルビィ Pp.739-741. 岡本夏生・清水御代明・村井潤一 (監修) *発達心理学辞典*　ミネルヴァ書房

草野淳子 (2014) NICU に入院した子どもの母親の愛着形成のプロセスと看護介入に関する国内文献レビュー. *母性衛生*, 55, 502-509.

小島賢子（2017）母子関係に関する文献レビュー －身体接触が及ぼす効果－. *大阪総合保育大学紀要*, 11, 131-140. KOJIMA

小島賢子（2019）母親と子どもの情緒応答的な関わりについての文献レビュー. *千里金蘭大学紀要*, 16, 106－119

今野義孝・水谷　徹・星野常夫（2001）わが子虐待の早期発見と早期教育に関する考察 ：母子の愛着形成とわが子虐待の予防. *文教大学教育学部紀要*, 35, 105-117.

金谷有子・赤津純子（2014）現代の家族関係と愛着に関する文献研究. *埼玉学園大学紀要*, 14, 169-174.

キン・イクン（2011）青年期の愛着行動特徴と漸成発達の親密性の達成との関連. *立教大学心理学研究*, 53, 17-28.

Lorenz, K.(1957) *Taxis and instinct*. International Universities Press New York

前田重治（1992）*臨床精神分析*　誠信書房

Marks, I. M. (1969) *Fears and phobias*. London: Heinemann Medical

水口　崇（2020）乳幼児期の動作模倣における自他の変換メカニズムーMeltzoff の模倣論－ *信州心理臨床紀要*, 19, 133-145.

村田孝次（1992）*発達心理学史*　培風館

本島優子（2011）アタッチメント発達の予兆: 妊娠期における母親の子ども表象に着目して. *ベビーサイエンス*11, https://www.crn.or.jp/LABO/BABY/LEARNED/11/MOTOSHIMA_GAKKAISHI.pdf

向井隆代（2018）児童期から青年期前期の愛着測定－児童愛着面接 (CAI: Child Attachment Interview) の可能性－. *聖心女子大学論叢*, 132, 155-180.

中島聡美（2016）女性における複雑性悲嘆：愛着と養育の視点から. *武蔵野大学人間科学研究所年報*, 5, 29-39.

中野日出美（2019）*自己肯定感が低い・傷つきやすい・人とうまくやれない それは、"愛着障害"のせいかもしれません* 大和出版

岡田尊司（2011）*愛着障害 子ども時代を引きずる人々* 光文社

岡田尊司（2013）*回避性愛着障害 絆が稀薄な人たち* 光文社

岡田尊司（2016）*愛着障害の克服 「愛着アプローチ」で、人は変われる* 光文社

岡田尊司（2019）*死に至る病 あなたを蝕む愛着障害の脅威* 光文社

Ratter, M. (1968) Concept of autism: a review of research. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 9, 1-25.

Spitz, R. A. (1945) Hospitalism: an inquiry into the genesis of psychiatric conditions in early childhood. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 1, 53-74.

Spitz, R. A., & Wolf, K. M. (1946) The smiling response: a contribution to the ontogenesis of social response. *Genetic psychology monographs*, 34, 57-125.

田林　明（2007）日本農業の構造変容と地域農業の担い手．*経済地理学年報*，53，3-25
高田 実（2015）救援ギルドとエルバーフェルト制度－20 世紀初頭イギリスにおける「新しいフィランスロピー」と地方の福祉－．*甲南大學紀要文学編* 165，241-253
高橋惠子（2010）*人間関係の心理学－愛情のネットワークの生涯発達*　東京大学出版会
高橋惠子（2013）*絆の構造 依存と自立の心理学* 講談社
田附紘平（2015）心理臨床におけるアタッチメント理論の「現実性」の問題－精神分析との対比から－．*京都大学大学院教育学研究科紀要*，61，79-91.
田附紘平（2017）クライエントのアタッチメントパターンと心理療法における内的体験-成人への個人心理療法に関する研究の概観を通して．*京都大学大学院教育学研究科紀要*，63，67-79.
山本政人（2011）日本におけるアタッチメント研究の展開．*学習院大学人文紀要*，9，35-54.
米澤好史（2015）*発達障害・愛着障害 現場で正しくこどもを理解し、こどもに合った支援をする 『「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム』* 福村出版
米澤好史（2018）*やさしくわかる！愛着障害－理解を深め、支援の基本を押さえる*　ほんの森出版
米澤好史（2019）*愛着障害・愛着の問題を抱えるこどもをどう理解し、どう支援するか？ アセスメントと具体的支援のポイント 51* 福村出版
米澤好史（2020）*事例でわかる！愛着障害現場で活かせる理論と支援を* ほんの森出版

付　記

１．本来，和訳ではなく，英文の原典を通読すべきである。今回，Bowlby，J.の愛着理論の国内の第一人者，黒田実郎氏の和訳を読み解くことにした。それは日本国内における Bowlby，J.の影響を検分する上で有意義と考えたからである。

２．多くの研究は，言語的な命題を設置して，検証後に，その命題の真偽を論じる。検証の方法は，数的データの分析を行う場合もある。一例を挙げれば，医療，農林，畜産，水産等のバイオサイエンスは，数的データを統計によって分析する場合が多い。この場合も“A は B である”といった言語的な命題を設定する。統計的検定の結果に従って，言語的命題の真偽や妥当性について議論する。但しバイオサイエンスにおいても，言語的ロジックを用いる場合はある。心理学もバイオサイエンスやその他の科学と同様，数的データを持ち出すこともある。また，言語的ロジックにより研究の暫定的な到達点となる理論構築を行うこともある。但し，言語的命題を設定した後，何らかの方法を使用して，言語的命題の真偽や妥当性を評価する点では一致している。よって，巨人 Freud，S.の言説であろうとも，理論を構成する一文は決定打となりうる。

３．本研究は科学研究費補助金（No.17K04348）の助成を受けて行われた。

（2020年11月30日　受付）
（2021年 2月22日　受理）